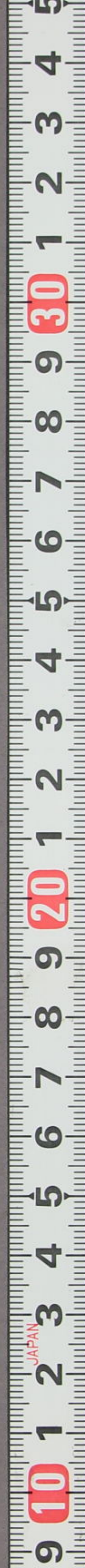




俳諧今人文集



松越屋分帳の序

恒丸

山有る栢と松越屋を以て前住の山栢れ
 婦も松越屋にありて雪の日の夕
 夜も侍者にならぬとて花も
 いやう嵐も入る三伏のふも
 ともなひに服を着る方より
 栢の葉も一と二の葉の
 葉も何まもあはれな
 ところの栢もあはれな
 松風もあはれな

文化

首より恒丸

不之告分根の序

みちき

系なることおもむく世人おとすことおもむく
 なることおもむく世人おとすことおもむく
 ほくことおもむく世人おとすことおもむく
 命にたつよ叶ふものなることおもむく
 新呂女つねのひきくことおもむく
 の今日よくことおもむく
 いてやまのくことおもむく

とくことおもむく世人おとすことおもむく
 命にたつよ叶ふものなることおもむく
 新呂女つねのひきくことおもむく
 の今日よくことおもむく
 いてやまのくことおもむく

文化のついで

金令書

世と事所よれすむ世の

運草

作口人

箱敏紀行

乙二

六日より大間の渡より箱敏へ渡り風の風まじし
 付よりより八日やまをせしそ風の吹る由く
 とまじけいさ大浪のいくむらもまき昆布のそ
 せよせし船の風とれたらうよ言ぬやまを
 とふ東風といえまじ西より吹ぬよ
 十八里乾の新船神のうしかはなうく流れ
 おつる船はまじ布一棹の何ううんり
 横た等り及はるももう魚こもくおん地
 布廣り何地北よりまじてせらり七里より

雲霧くられたの時もゆるゆくり汁よん申まてん
 とつや鳥とたよりて船ぬく人のこしせめふ
 たりよあつと告ぐよもせし魚あて

おもふも浪たやりの月おか

おれやまよさめき何波犯すむま大陽松家へ
 ぶらとの集りて語念飛り中へ今日とまじ
 是ともてやませの紙目とうなうぬ
 二色の葉の枝と紙よをか
 おとせしむら

待りの短葉の白き

何れ

雲よりねむきも月のはげし
揮毫のうら

いさしとをたぬしそ人のた
多田氏より京の何れも終りし
懐きし頃
懐せよと有りねと

赤人の目より董り森りむね
月をいつさぬと芒のうら
右ねと二の紀り

擬隆在帝唱歌

仇一き終のつきしと
さうよ梅の志つ枝と
園をこそぬくはは好の
けつんはちの
術をすしと

鼻をらと猫もたき

田舎店護物

陸連の破りてきたるまきの備のわつちやう
傳りぬ是くそれたる近江のや

何そ〜あ〜波よせとてかえり浪涛書舟の
海ま〜やあ〜高きの日もたれや驚りし
糸と〜と多と梳く〜傳〜ちの
糸と〜古の山〜とれと〜世の中

右 英一蝶

荻舟荻島記りの序

士朗

本岡老人の歌よ荻舟の記念あり荻島よ
語〜るものよまれば月と伝たす〜より
稲舟かあ〜雲おの鏡よいさよ〜る舟かあ
ほひ小寒〜酒志ひな〜の誰人〜る阿佐院
坊と付らむとあ〜〜吹秋風よけふの
か〜草を傳りぬむ〜重徳仁典此房よ
わうれたや〜時むひの髪とらむ切〜
つれを記念よ声覚悟と〜とま〜たが〜
つら〜と〜は〜〜よま〜のぬき

筆の跡了きとて古硯をせよとわらうたれハ
筆のあはれとてかたじけなく好まきとめを
せしむるもさしやうとてわらひはし
枯那く暮のやすきも由う人の好き東
あつてもとてあつて後のはよ忽りはあつて
いよく不朽をぬらうとて老人の保ちよ
たしや

士朗

おねえ久積

成美

月日と百代の過客行く年も旅人ありと
唐文字をとるつゝもあつて生涯を多ひよあつて
時々のまことの世雪の小葉は下ねつゝも
いひやうとてあつてあつてあつてあつて
人丸貫之めも愧はれ新あのおもひまの東坡
山谷もあつてあつてあつてあつてあつて
天下老宗通を印の善也むし一頁章下印の
年ちと雁のちうとつとあつてあつてあつて
の足野よ裾ぬらうとて荒ゆの月をもあつて

事のありき 世は鹿島記行の谷にそそり刻む 一の紀行り帰路

自準の宛とて題して藁紙を寄るに其を
らるこひやされし板久の里に医家本間道悦
仙舟松江といひ一人よそ自準をそ別号なり
こゆとまうに彼家に来りしき由をむありし
久しの家者やされし以て其りく医術れり
まなされし物部道意とあると一紙の折言
ありと五代のち及統たてられし今の松江よ
ありとあると小川といふは後一伝りかの
折言紙とて一ありしと書はるひいたる句

あるがちゆのそ一あるた書の及故のたふい
やといふははるして大なるわとよひしつこあり
むの持しつりしきふ此書と志がよものそと平
至りしと蹟の展覧とていふなり年月と經
る物らあるひよたのつちりむひも
かうしゆとて松江かめらくをねとてまもむも
雅情もたがぬくやうとてあまのさひりむら
けむらあまのさひとて彼からの中よむひなる
ものもと唐の信よ雙釣しと極よ刺し
一巻とてあまのさひりぬあまのさひり

境がまゝ見えぬ人もたゞしく目を見てもかゝり
しよその志あつた好く計をゆるがすア
糸麩ににたるの革何年か母本書のおきとい
よくむきかゝりてなめ久家かたきえつこふ
るしよ水帳のなつたことよけえおといひ
その来由とまゝのほとけ也

文化壬申

随齋筆美

題叢集抜

世の田樂放下なすいふも然あつて何ひい
玉とちのけしち鈕と何中しうは平火とのこ
入るらんを帛とまきうしを蝶とたし
は梅くのわき人の目たよりなきありあや志さ
やそののりしを是とまきつよおえし
外のをしよあつたもつたつたもつたもつた
ちちちしよはひよまかた術をほおし
をれたちのときをよちのぼのこちをかくと
あたまに 徳のみの句はくもむもひしを籠り舌

乃心成はみて後世のつゝ言妙のほふいよも
入たる魚一和奇の師なり一あふはかをと
もてあふすししつたを多し古人の求たる
かよともめそふくちかひ所もちあふれもは
ちりとやいし初めの林と日入魚は山口の枝お
他くそ世のつらめむしつらんあふかとの
浦人を節とつらねるをそとせ幾歳のころ
諸の人を此外名たる人への句を諸集あり
敬見よきい是とのと記して近世寶曆以後より
竹こその伝者して廣くあつたおほくそひて

そは数一万二千余句なり至り絶えつるそは
他例とらんむ人を世書よあふそを關しは
事つら魚一わもあふそふいの夫本針よ
名つけぬ魚きのつらふ是そは○よん常よ
通しそ伝意の切はもふかの鈕とらやう
玉とちうくつら妙所よあふそぬまのけははら
ちうめ魚一すそて庖丁うかふれ輪扁う輪
たのそそのふよはくき所ハ言ひもそ論を
あふそはのいよあふそ

随存本み跋か

君へ言ふ此の序

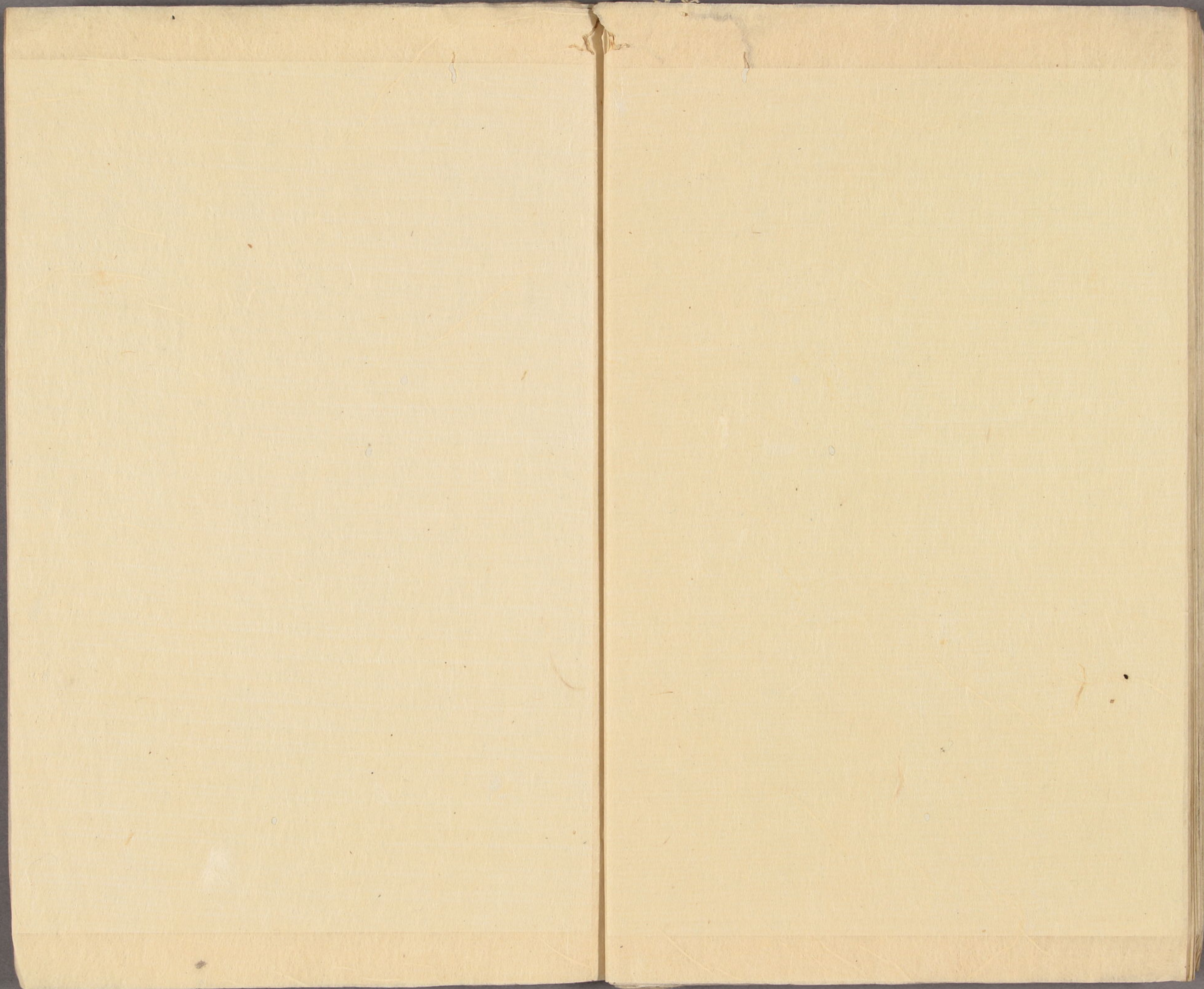
連城夜光とまのしえいふくくう何故
かられたる書は立たるいひもはもささその
名のしとほくふせう響く物集あつては
ふくと備せりわねとてはゆふのあつた
とれ世ふいらの作者をまのほくせうの
えも一ゆのも一はゆの集はもたつて
花のふものゝゆ年の老ゆくとまのし
芝の中のしとれわは地もまのし
おも一う一おもふうははたのまのし

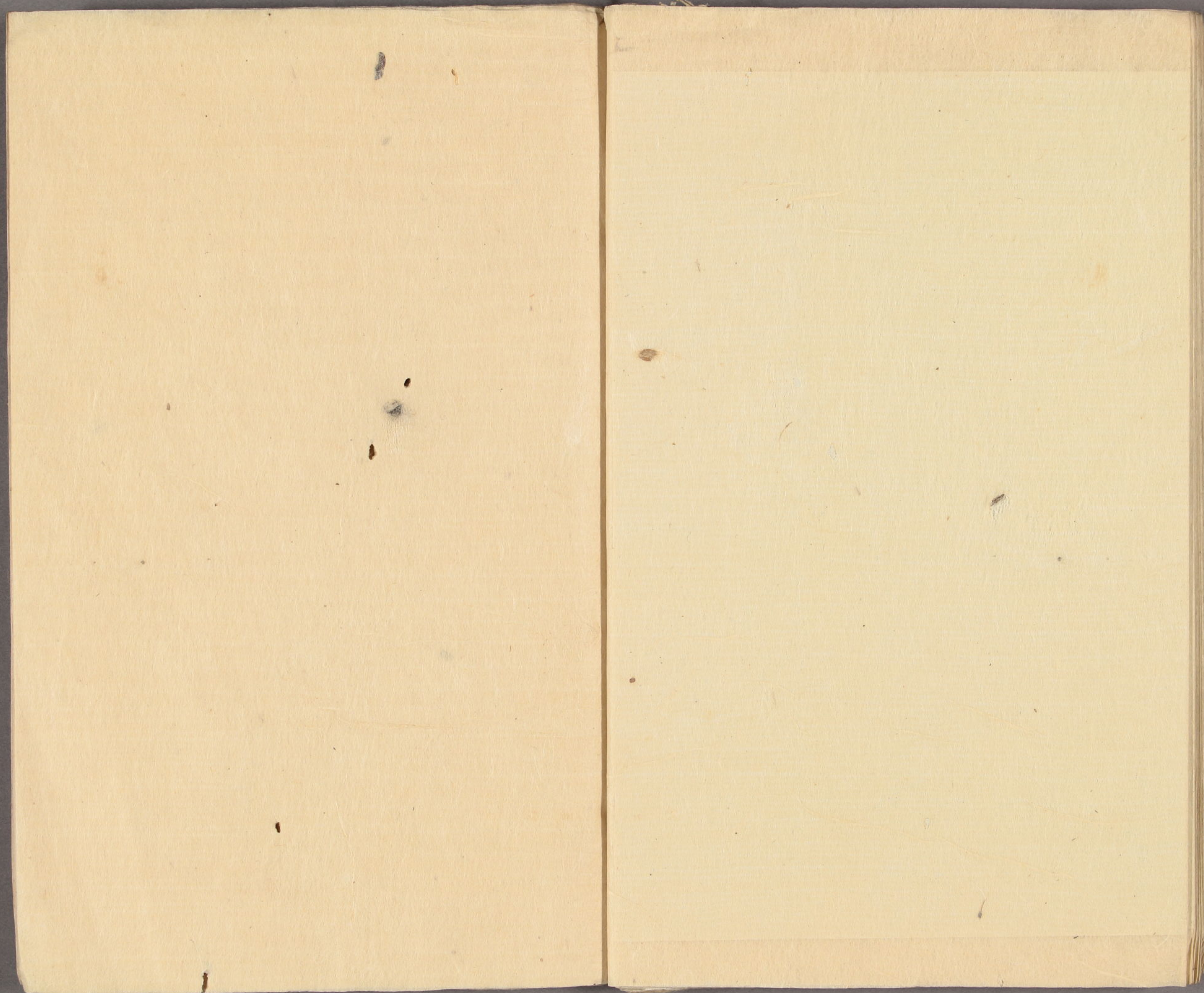
ねもひくららなれは是と無價のたの
ちうれとまのし思ひたせり今とれたらの人
句とつとつとそたわくあつのもたつて人と
世も富り人ふりふゆ一とおもひたり也
文化主申
随ふかままか

かひ念りほつたよも
まあぬと
花の序

花のしらけし小橋さうけいさうら
あつら橋のむえんとを田川の比側所を
踏むはけいはせ十八の字の終り是れ
枝の身とほくはせらる。此らのもちくお
らうらけ 藤子屋のやうにわらうらうら
さうらけ 藤子屋とあつらうらうら
あつらうらうらうらうらうらうら
さうらうらうらうらうらうらうら
さうらうらうらうらうらうらうら
さうらうらうらうらうらうらうら
さうらうらうらうらうらうらうら
さうらうらうらうらうらうらうら
さうらうらうらうらうらうらうら

昔は毛や小橋はえれい胸のさく
人他のほろろ甲の園はいらうらうらうら
田路の里といひけい昔のさく
神のもたまうらうらうらうら
はけいを編せうらうらうらうら
くうらうらうらうらうらうら
は右の門の松葉の枝うらうら
あつらうらうらうらうらうら
あつらうらうらうらうらうら
あつらうらうらうらうらうら
あつらうらうらうらうらうら
あつらうらうらうらうらうら





以下全て
白紙

